THE FRONTIER TIMES

Report

3 ホールスクールアプローチと気候変動のプロジェクトを行う1校として、ユネスコ本部(パリ)より選ばれました。

2016年文部科学省委託事業の一環として「ESD重点校形成事業」が始まりました。全国から選ばれた24校は、「サステイナブルスクール」として、個性豊かな取組を行います。 名古屋国際中学校・高等学校は、高校課程でSGHアソシエイト活動が実践されています。その活動は、国際社会にある多くの社会課題の中から"多文化共生と減災・経済活動と貧困・社会生活と循環"の3つの分野を探究していきます。その活動をより深化させるために中学校課程においてサステイナブルスクール活動が計画されています。

さらに、ユネスコ本部(パリ)より「Implementing the Whole-School Approach under the Global Action Programme on Education for Sustainable Development(ホールスクールアプローチと気候変動)」のプロジェクトを行う1校に選ばれました。日本は、ブラジル、フランス、ドイツ、セネガルなど12カ国の第一グループに属し、各国の学校が気候変動に関わる取組の実践・交流・報告を行います。本校では、各教科活動の他、Sus-Teen！を中心に光化学オキシダントや酸性雨の測定、ゴミに関する取組を行うことで気候変動について探究していきます。また、海外研修や校外学習でも気候変動に関わるテーマを設定することで地球規模の社会課題を自らの課題と捉えていくことが今後の大きな目標となります。✪

4 第4回 ESD日本ユース・コンファレンスに参加

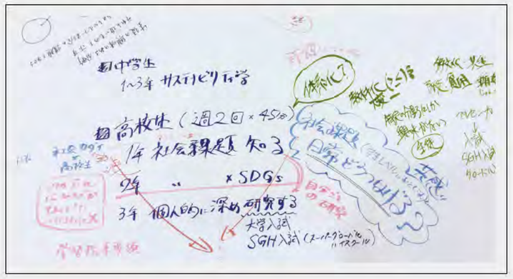
日本には開発目標の達成の責任と、途上国を支援する責任がある。
SDGsの達成に貢献するESDの取り組みを考えていく。

2017年9月23日・24日に幕張国際研修センターにて第４回ESD日本ユース・コンファレンスが開催されました。今回の会議は、ユネスコの世界大会のプレ・コンファレンスとして始まり、全国のNPOやNGOの職員、文部科学省スーパーグローバルハイスクール指定校、サステイナブルスクール認定校やユネスコスクールの教職員をはじめ、大学や企業から多くの参加者が集いました。

基調講演として、文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐 鈴木規子氏が、ESD推進に向けた国際的な動き、ESD推進に向けた国内の動き、SDGsの達成に貢献するESD、そしてユース世代への期待についてお話しされました。ESDの基本的な考え方を共通理解し、国際的な取り組みを確認することから始まり、グローバル・アクション・プログラム(GAP)におけるユースの役割の説明から、その情報を教育現場にどのように落とし込んで行くのか、また、ESD推進の中核を固めた上で、各組織とのネットワーキングで大きな力を生み出すことの重要性を再確認する機会となりました。

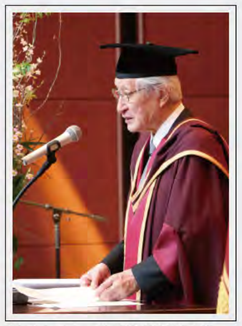
全体を通して感じたことは、ESDに関わる人や活動の多様性とつながりを求めているということ。それがユースと言われる18～35歳に期待されており、その中で、お互いの長所を理解し、必要に応じては補い合いながら現在の活動を高めていくことを目的としていました。今回のカンファレンスへの参加を通じて感じたことは、ESDに関わっている人々は皆、意識が高く、アクションが起こせる人々であるということ。今後、そのような人々とネットワークを繋ぎながら次世代の担い手を増やしていく、巻き込んでいくこともユース世代の役割であると感じました。✪

社会科・SIA特論担当 杉山友規



5 元米国駐箚特命全権大使 加藤良三氏より祝辞をいただきました。

4月3日に行われた入学式。真新しい制服に身を包んだ新入生の皆さんを祝福する温かな雰囲気で催されました。毎年、入学式には各界でご活躍されている方をゲストにお招きして、祝辞をお願いしています。一昨年のM. Fraser氏(在名古屋カナダ領事)、昨年の久木田純氏(国連フォーラム共同代表)に続いて、今年は、加藤良三氏(元米国駐箚特命全権大使)をお招きして、祝辞をいただきました。加藤氏は「国際化」という観点で若い生徒諸君に求められる資質や態度について、ご自身のご経験を元に次のように述べられました。



▲加藤良三氏　元米国駐箚特命全権大使
現三菱商事社外取締役

現代は「国際化の時代」というより「日本が国際化しなくてはならない時代」です。アメリカで始まっているUberを始めとする新しい形のビジネス。こうした新しい発想をリードしていくことが、日本に求められる「国際化」です。新しい発想はリスクを伴うものであり、日本はリスクを嫌う国です。しかし、リスクを取ることなく果実だけを享受することは世界が許しません。自分よりも大切な何かがあるという認識のもと、そのためのリスク・テーキングを日本は正当に評価して、若い人達の「やる気」を挫いてはならないのです。

シリコンバレーの偉いところは、「失敗を恐れるな」という精神が行き渡っているところです。「失敗」の積み重ねが「成功」を産み出すことを認識している。日本にもそういう気風があって欲しいと思います。

セレブリティやスターといった一握りの人たちが偉いのではありません。ワシントンで大使をしていた時、アメリカの友人に常々言っていました。「日本庭園は美しい。しかし、庭園自身には自分の美しさを保つ能力はない。庭園の美しさを保つ大きな力は練達のガードナー(庭師)である。日が昇り、客がやってきた時、庭園は美しく整備されているが、ガードナーの影はない」

ガードナーは「プロ」です。プロの存在が随所にあって日本は国際社会にここまでの地歩を築いてきました。国際的好感度も高い国です。日本という国を誇りに思うとともに、広い世界にいる優れた人材とのコミュニケーションのラインを作っていただきたいと思います。

生徒諸君には「失敗を恐れるな」、教職員の方々には「前向きの失敗を許す雅量をもっていただきたい」、そして「謙虚で、根気のある」人間になっていただきたい。

この祝辞を心に刻んだ新入生の皆さんは、価値ある学校生活を送り、国際社会に飛び立っていこうという決意を新たにしたに違いありません。生徒諸君の活躍を期待しています。✪

発行 名古屋国際中学校 高等学校
NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL
所在地 〒466-0841 名古屋市昭和区広路本町1-16
発行月 年間４回
制作 学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校 学内広報チーム
デザイン cluch on cluch Co.,Ltd.
企画協力 株式会社 イーブレイン

TIMES 設置配布協力先
名古屋国際中学校・高等学校事務局前／名古屋商科大学 地域活性化研究センター／名古屋商科大学 中央情報センター／独立行政法人国際協力機構中部国際センター／認定NPO法人ICAN

広報紙「THE FRONTIER TIMES」に関するご意見・ご感想は ft@nihs.ed.jp までお送りください。本紙に掲載されている記事、画像など全てのコンテンツの著作権は名古屋国際中学校・高等学校に帰属します。私的使用以外の目的で複写・複製することはできません。

2017101215000

THE FRONTIER TIMES

[フロンティア・タイムズ]

▲光楓祭閉会式におけるクラスTシャツコンテスト(パフォーマンス部門)の優勝(中高一貫5年1組)と準優勝(中高一貫5年2組)発表の様子

[1st IB Workshop in NAGOYA !]

On August 23-25, Nagoya International Junior & Senior High School hosted a regional IB Workshop. This was the first IB Regional Face-to-Face Workshop ever hosted in Nagoya. Being granted the IB authorization in December 2014, and receiving its first cohort on April 1st of 2015, NIHS became the first Article One school in Aichi Prefecture to implement the IB Program.

True to our "Frontier Spirit" motto, we are once more honoring our call, by being the first Japanese school in Aichi Prefecture to host an IB Regional Workshop. Five workshops were conducted this time, four of them being MEXT-supported workshops: (a) Administrators, (b) Counseling, (c) CAS, (d) Japanese A, and (e) English B. All workshops were Category 1 workshops, that is, they were meant for those who had never done an IB Workshop before. All workshops, except English B, were conducted in Japanese. A special highlight was the Counseling workshop aimed at college counselors and those with the role of getting IB students admitted into universities, both in Japan, and abroad. This was the first time that a Counseling Workshop was ever offered in Japan. Overall, the participants, the workshop leaders, and the IB representatives were very pleased with the quality of the workshop, the quality of the facilities, and the smooth support offered by our staff throughout the workshop. A total of 60 participants attended the workshop. According to the IB Field Representative, it was very rare to see a new IB school hosting such a high quality workshop. Everyone was equally impressed.

Part of MEXT's program of educational reform is the establishment of more IB Article One schools in Japan, such as NIHS. Back in 2013 there were a total of 24 IB schools in Japan, 18 International Schools and 6 Article One schools. As of September 2017, there are about 47 IB schools, 27 International Schools and 20 Article One schools. Currently there are about 25 Candidate Schools in Japan, 15 of which are Article One schools. In the upcoming years the number of Article One schools offering the IB Program will overtake the number of International Schools. MEXT's target remains the same: to establish at least 200 IB schools in Japan. So definitely hosting an IB Workshop in Nagoya was only the first of many more workshops to come! ✪